

読書をめぐぐる思い

「かわいそうなぞう」をとおして

「ねえ、みんな上野動物園って知ってる。」「知ってる。」「知らない。」「子どもたちの反応は、様々である。

私は毎年夏になると必ず「かわいそうなぞう」を子どもたちに読んで聞かせる。

大東亜戦争の末期、上野動物園では、ライオンも、トラも、ヒヨウも、クマもだいじやも毒を飲ませて殺したのだ。最後に三頭のぞうも殺されることになった。わが子のように可愛がっていたぞうを殺さなければならなくなった、ぞう係の人のせつなさ、くやしさを、「戦争をやめる。」「戦争をやめてくれえ。やめてくれえ。」

「これは本当にあつたお話なのよ。」私は自分の戦争体験を重ねながら子どもたちに伝えてきた。でも子どもにはどんなふうに伝わっているだろうか。反応は様々である。

三十年前、はじめてこの本を手にした時、思わず涙があふれ読み進めなかったことを思い出す。今でも時折子どもたちの前で読みながら、涙がこぼれそうになる時がある。

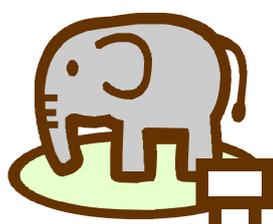
遠い昔、ある保育所で読み聞かせをしている時、年長児の女の子が、涙を一杯ため、「かわいそう。」「と、じつと本を食っているように見ていたあの瞳、今でも私の胸に焼きついて離れない。

今年もまた、暑い夏がやってきた。子ども館や学校で「かわいそうなぞう」を読んだ。何の反応も示さない子もいた。それ

でも、ひとりでもふたりでも、戦争の悲惨さを、恐ろしさをわかってくれたらよいと思う。

そして来年も再来年も「かわいそうなぞう」を読み続けていきたいと思う。

戦争のない、平和な日々を願って。



足利市 女性

新聞を読んで思ったこと

私の家では「日本経済新聞」を読んでいます。八月四日の夕刊の「クラスルーム」というコラムに載っていた記事を読んで、感動いたしましたので書きました。

お書きになった方のお名前の代わりでしょうか、文章の最後に「学校研究会」とありました。

記事の内容は、一学期末に開いた保護者面談の時一年生のA男君の母親が、開口一番「六年生に本当にお礼を言いたいです。」という。担任の先生は「えっ、なぜ六年生なの。」「と母親の話を聞きました。

A男は小学校に入学してから、幼稚園時代にはやったことが

なかった三歳の妹の世話をするようになったとのこと。おもちゃの片付けを手伝ったり、トイレにつき合ったり、絵本を讀んで聞かせたり、折紙を教えたり。他の六年生もぬり絵を作つて持つてきたり、一年生から一寸^{ちよつと}たたかれたりしても文句も言わずニコニコと相手をしているというのです。

一年生との接し方を一生懸命に考えて活動している子のお母さんは、「うちの子も早く六年生になって一年生のお世話をしてみたいな様子なんです。」と。

私はこの記事を読んで少なからず驚きました。

この六年生の子どもたちが大人になったら日本は思いやりのあるやさしい社会ができていくことでしょう。私たちのような高齢者にも障害者にもやさしい親切な人が多くなって、生きていく幸せを感じられる日本になるだろうと、心温かな気持ちになりました。



下野市 高山 登美子

おばさんのひとりごと

「絵本を通して「命の大切さ」を伝えたい」

お話しボランティアの活動が図書館以外にも大きく広がり、小学校での「読み聞かせの時間」に参加するようになりました。朝、授業開始前のわずかな時間ではあるけれど、「絵本の魅力を子どもたちに伝えたい」とテーマを持って読み聞かせの活動をすることにしました。

絵本の持つ魅力、それはあわただしい毎日の中で忘れていた大切なことにもう一度気付かせてくれるということ。自然を慈しむ心、素直な感動や本来の自分らしさを知ることができるもの。そして、命の大切さ 生きていくことのすばらしさなど絵本を通して子どもたちに伝えることができたらと思うのです。

「ダギーへの手紙」(エリザベス・キュプラー・ロス/文、アグネス・チャン/訳 佼成出版社)を小学校五・六年生向けに読み聞かせをすることにしました。この本の主人公、小児がんで余命三か月と言われた九歳のダギー少年は、がんで苦しんでいるときに「命って何? 死って何? どうして小さな子どもが死ななければならぬの?」と医師に手紙を書きました。大人たちは「いのちのこと、死のこと、何も教えてくれない。」と少年の悲しい訴えに胸を打たれた医師は「いのちと死」が同じ重さを持ったかけがえのないものであることを、木や花、季節に例えて返事を書きました。この手紙を読んだ少年は元気を

取り戻し、十三歳まで生活することができたということです。

命の尊さを教えてくれたこの絵本を子どもたちに読んだ後、同年代の子もたちはダギー少年の話をもどのように感じているのか、私はとても気になっていました。そんな時に、子どもたちからこの本を読んだ感想の手紙が届きました。

「生きる楽しさ、大切さを教えてもらった。」「今まで感じるものがなかった。『いのちのこと』や『死ぬということ』を知ることができた。」「いのちの大切さを知った。」

子どもたちは絵本が伝えたいことを、きちんと受け止めてくれたのです。

これから子どもたちに読み聞かせを通して、絵本のメッセージを伝えたいと考えています。

那須町 おはなしおばさん

かなえられたかぼちゃ作り

私は、昨年の三月に一冊の絵本と出会いました。以前から我が家の畑でジャガイモ作り等をした乳幼児とその母親たち二十数名から、「小野さんのイメージにぴったりだから。」と、絵本作家いわむらかずおさんの「14ひきのかぼちゃ」を手渡されたのです。

農業体験のない十数組の娘や孫のような親子は、開放した我が家の畑で、蒔き付けから収穫までの一連の作業を行ってきた。自然の中でワイワイ・ガヤガヤと土に触れ合いながら栽培し、本物を食べ、食の大切さを実感したそうです。私も農業者として、畑や作業の一部をお裾分けし、子どもたちの笑顔から元気をもらい励みとしていた間柄でした。

絵本のプレゼントという予期していなかった好意に、胸がジンと温くなりました。

早速めくった絵本のページには、十四匹のねずみの家族が、かぼちゃの種を命の粒として、蒔き付けから生育管理、収穫、そして食べるという命の営みが、短い言葉で克明に表現されており、あつたかーい気持ちになり感動しました。私にもねずみの家族と同じような営みがあります。しかし、今の家庭でこのような営みがどのくらいなされているのか考えさせられ、大切なことを忘れてるように思えました。

そして四月、私は絵本の感動を胸に「子どもたちのために畑を開放し、何か役立ちたい。」と地域の小学校を訪ね、校長先生に思いを伝えました。

それから一か月後、

「五年生（四十二名）が、総合的な学習の時間でかぼちゃ作りに挑戦したい。十四ひきのねずみが、かぼちゃを栽培したように。そして、収穫したら料理をして、みんなでおいしく食べたい。」

との返事をもらいました。私の夢は、いっぺんに膨らみました。

早速、地域の学校支援ボランティアから植え付け指導の協力を得ながら、四アールの畑でかぼちゃ栽培の物語が始まりました。

まず、「14ひきのかぼちゃ」の朗読の後、子どもたちは慣れない手つきで鍬くわを持ち、汗を流しながら、

「元気に育つてね。」

「おいしい実をつけてね。」

と、一人ひとりが主役となり、なごやかな雰囲気ふんいきの授業となりました。

植え付け後は、登下校中の子どもたちや近所の見守り隊が、除草や敷きわらの管理を手伝ってくれました。子ども、先生、地域の人たちの愛情に包まれて、かぼちゃはたくさんの実を付け、収穫となりました。子どもたちからは、両手に抱えきれない程の手のひらサイズのかぼちゃに歓声が上がりました。

後日、子どもたちからは、「小野さんや見守り隊の皆さんのおかげで、立派なかぼちゃが無事に収穫できました。」「みんなで作ったかぼちゃで、どんな料理にするか調べているところです。かぼちゃパーティーが楽しみです。」

との手紙を添えてかぼちゃが届きました。私は、夢が実現できたことに安堵あんどし、うれしくて早速、礼状の絵手紙を書きました。

一冊の絵本との出会いが、おせっかいな私に、子どもたちのかぼちゃ作りという夢を実現させてくれました。そして、動かなければ出会えなかった感動と、心のつながりを与えてくれました。今、「14ひきのかぼちゃ」は、新たな私の宝ものとな

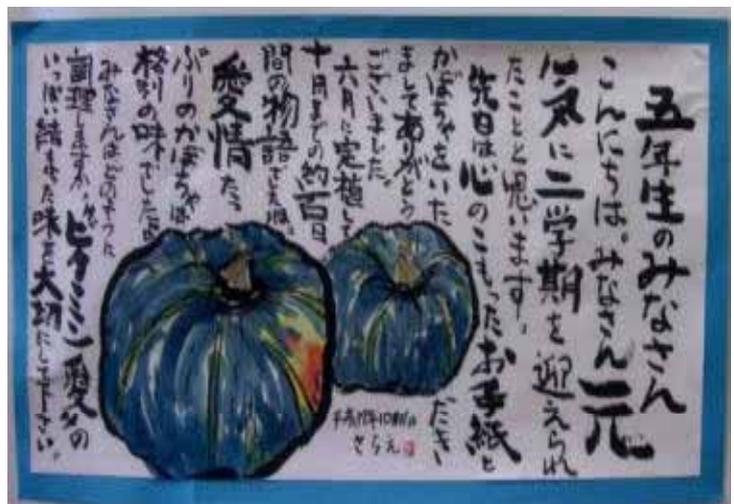
りました。

これからも、私は農業を通して培った技術や経験を生かして、子どもたちと一緒に土に親しみたいと思います。そして、農業体験を通して「食の源」として、農作物に愛着を持つ心を育てていきたいと思います。

いつの日かまた、きつとすてきな絵本にめぐり合えることを夢みながら、今日も農業に精を出しています。

方言での読みきかせ

「ダイシャクボウのボタン杉に、鷹たかが巣をかけたそうだ。」
「おめえ、みたけ。」
「若い衆わかしゅが取りに行くつちぞー。」



さくら市 小野 幸枝

こんな方言で始まる、昭和初期の児童文学者「千葉省三」の鷹たかの巣のとりの作品を、朝の読書の時間に読んでいる私です。

子どもたちが、田んぼ路を思い思いの格好で歩くさまは、私の頭の中にはカラー映像を見るようにはつきりと映ります。そしてその子どもたちの息使い、足音までが聞こえてきます。それは六十年前の私の姿とダブって見えてきてしまうのです。朝起きると、「今日は何をして遊ぼうか。」と心いつぱいに広がる楽しみを、あれこれ選り、朝食もそこそこに友だちの家に集まる、その時代の子どもの姿です。そして自然を教師に、遊びの中で危険なことを知り、毒草薬草名を覚えて大きくなりました。そんな時代の子どもたちが活躍する物語を、文字だけでなく肌で感じてもらえるように読もうと、内容は空んじるくらい読んで、今朝の読みきかせをしました。

ボタン杉に登った三ちゃんたち。腰かけている横枝の先に「たかのすらしいもの」を見つけた三ちゃん。そりそりとはつていく。手が届こうとする所で、すーっと枝から落ちてしまう。オレ等は、三ちゃんが落ちたあたりをさがしたが、居ない。

「三ちゃん。三ちゃん。」
教室中しーんとしている。子どもたちが息をつめて次の事態を予想しているのだろう。

「いない。」
すると、思わぬ離れた枯草の中に半分うずまってボンヤリとすわっている三ちゃんが。

教室の中の空気が一瞬ふわっと動いた気配がした。子どもた

ちの緊張した予想を裏切って、ボンヤリしている三ちゃん。

子どもたちは、こんな事故があったなど、すっかり忘れて楽しく家路につく。

「あっちー。」
なんともユーモア溢あふれた結末である。

私は鹿沼の方言が得意です。というより鹿沼以外の土地の言葉を知りません。ですから正しいアクセントでお話する人をつらやましく思い真似まねをしてもできないのです。根っからの土地っ子です。

毎年度、高学年の読みきかせには、必ず千葉省三の「たかのすとり」を読むことにしています。読後、子どもたちの話をきくと、

「うちでは、おじいちゃんが、たかのすとりの中のことばを使っているんだけど、おじいちゃんも、あんな遊びをしていたのかな。」

「方言を使っている人を見ると、とってもやさしい感じがするの不思議。」

「おばあちゃんに聞いたんだけど、この土地のことばを使うと、本当に心の中で気持ちが通じるんだって。」

たった十分くらいの朝の読書でも、子どもたちが、お年寄りの気持ちを理解し、強い交流を生み、郷土の方言の良さをも見直してくれていくことと感じている。

本も宝、子どもも宝

図書館は、知識の詰まった宝の島だと言われます。でも、本がどっさりあり過ぎると、何から読んだらいいのか迷ってしまうものです。それなら片っ端から読めばいいのかもしれませんが、そうそううまくいくものでもありません。やはり読みたいと思うものが、常に自分の中にあることが望ましいのでしょうか、これまたそう簡単なものではありません。

しかしその点からすると、終戦直後に子ども時代を迎えた私たちは、ある意味幸せだったのかもしれないですね。なにしろ図書館はなかったし、そしてやっと手に入った本はすべて、魅力的な宝そのものにはか思えなかったのですから。

絵本を卒業してからは、月刊のまんが雑誌を買ってもらって見るのがせいぜいでしたが、発売日が待ちきれないでいた頃がとてなつかしく思い出されます。ここでは本の数が少なかったことが幸いしていたようですね。

読み始めると、何度も何度も読み返しました。こたつで腹ばいになって。お母さんが縫いものをしているわきの、干したふかふかのふとんの上で。北風の音を障子越しに聞きながらと……。

十分に読み終わると、今度は友だちの雑誌との交換です。誰にも先を越されず、タイミングよくこの交渉が成立したときの喜びはまた格別なものでした。それから友だちの家に上がりこんで、新しい本を発見することもありました。「怪人二十面相」

シリーズやアガサ・クリステイの「そして誰もいなくなった」などの小説が、まんがから離れるきっかけにもなりました。

これはまさに私にとつての図書館でありましたし、貴重な宝物でもあったのでしょうか。

こう見ていきますと、あの頃の子どもと本との関わりは、密接な子ども社会の繋がりがあってこそそのものようです。勉強なんかはそこそこにして、子どもの仕事は遊ぶこととばかりに飛び回っていた時代です。交通事故もなく、登校、下校時の不審者に対する心配もなく、大人になるため子どもものときにやっておかなければならないこととして、無遅刻、無欠勤で遊んでいたようなものでした。だからこそ得られた宝物だったのです。

しかし時代は変わりました。子どもらしい子ども社会が望めないのだとしたら、やはり大人の手助けが必要です。私たちの時代にだって大人のお世話になったこともあるのです。それは大々的な催しをするものではありませんでした。ただがらんとした部屋に町内の子どもたちを集めて、お話をしてくれた記憶があります。絵本の読み聞かせをしてくれたのかどうか、そこは覚えていないのですが、知らない場所で、初めて見る友だちの中にあつて聞くお話は、友だちと一緒になつてとても興味深く、感動を共有できたように思えるのです。あの感覚はやはり子ども感性に満ち溢れているときでなければならぬのでしよう。そういう大切な時期に、やたらコンピュータゲームやケイタイ遊びに呆けさせってしまうのには、もったいなさ過ぎます。そのときどきの過ごし方の大切さに気付かねばならないで

しよう。子どもらしく育たなかった子どもは、そのまんま無知な大人になってしまいます。

私は、あの頃の本との関わりを思い出すとき、家族、友だち、遊び回った家並みや路地が一緒に思い出されてくるのですが、今の子どもたちにも、なつかしい思い出が残るものなのかと、余計な心配をしつつ、よき時代の体験に思いを馳せているのです。

栃木市 男性

お伽噺「桃太郎」との出会い

私は、本来読書好きで、時代小説を多く読んでいた。定年を迎え、人生を経て余生に入った頃からは、病気に見舞われたり、雑事多忙の日々を過ごしているが、今もって好んで時代小説を読んでいる。

私の義父は、文学者で片時も本を離したことはない人であった。死期を迎える直前まで枕元には本が置いてあった。

ある時、ふとしたきっかけで、その本を手にしたとき「桃太郎」という大きな文字の題名が目飛び込んできた。それは芥川龍之介の本であった。早速その本を手にして一気に読み切ってしまった。なんとその「桃太郎」は悪い鬼を正義の桃太郎が

成敗するという大前提をくつがえしたものであった。

その時の感動は今もって忘れることができない。中国の「三国志」以上の気宇壮大な構想をもって書かれているのと同時に、文章も生き生きと魂を持った生物のように、躍動しているように感じとられた。

義父は、どのような気持ちで最後までこの本にこだわっていたのだろうか。今もって疑問である。

興味を持った私は、その後「桃太郎」に関する資料や本をあさり始めた。その興味は益々増すばかりで、お伽噺「桃太郎」にすっかりのめり込んでしまった。

よしっ！お伽噺「桃太郎」にかかわった知識や体験、これは自分自身の楽しみとしてしまい込んでしまうには、あまりにも、もったいない。この感動を少しでも多くの人々に知ってもらいたい。世のため、人のために役立つのならば、少しでも役立ちたい。その後、機会ある毎に、この話をして、ついに最初の出会いとして、老人介護施設の「敬老の日」のお祝い慰安のイベントに「桃太郎」の話を持ち込むことができた。幸いにも、手助けしてくれる施設の若い男性が、四コマ漫画風に「桃太郎」を書いて応援してくれた。

単調な老後の生活を送っている施設の老人たちは、角度を変え、見方を変えて解説した「桃太郎」の新しい出会いに感じ入ったのだろうか。子どもの頃を思い出したのだろうか。目は生き生きと輝き、明るい雰囲気醸し出してくれた。その日は天にも昇る思いでうれしく、有頂天となってしまうた。

これを機会に私は、お伽噺「桃太郎」を人々に伝えていかねばならないという希望をさらに強く持ち、余生も明るくなくなってくるをおぼえた。

その後は、機会ある度に、子どもたちを相手に、小学校・公民館・児童館・私塾の誕生会やクリスマスパーティー等のイベント等で話をしていく。

たった一冊の短編小説「桃太郎」を通じて子どもたちとの対話は、単にお伽噺を後世に伝えるだけでなく、その場は学習の場としても提供されているのである。

例えば、

「桃太郎」の話は、いつ頃の話か。

「桃太郎」の話は、なぜ全国で伝承されているのか。

「桃太郎」は、どんどん大きくなるが、爺さん・婆さんは、どうして年をとらないのだろうか。

「桃太郎」は、なぜ犬・猿・雉子を連れていったのか。なぜ力持ちの牛や、足の速い馬を連れていかなかったのか。

「桃太郎」の桃の実の中に、子犬がいたらどうなるのか。その答は「花咲爺さん」の物語の出だしとなる。

このように勉強する教材としても生かされてくる。その結果、子どもたちは、完全に「桃太郎」の世界に引きずり込まれてくる。そして真剣な面持ちで目は生き生きと輝いてくる。そこで出てくる子どもたちとの応答。これがまた、実によい。「桃太郎」を通じて子どもたちと気持ちがあふれ合い、夢の世界、現実の世界と様々に織りなす七色の糸模様は、皆酔いしれてくる。

話を終わって別れるときの子どもたちの背中を見てみると、大きく、伸びやかに、明るくなり、未来に向かって力強く進んでいくように見えてくる。

単なる本の読み聞かせだけでなく、最近では、自作自演のアドリブの「桃太郎」を演じ、自己満足をしている。

下野市 菱澤 清

児童生徒に演ずることを提唱

今日、子どもたちが口をきかなくとも用の足りるような時代になりましたが、便利になったようでも、何とも言語生活の貧弱になった状況が蔓延しております。もっと楽しい思いでお互いの思いを伝え聴くための、日常の教育的試みが行われてしかるべきと考えています。

豊かな音声言語生活のためには、自分たちで演じてみるのが大切です。初めて経験する子は戸惑ったり尻ごみしますが、何か一つ短い表現でも、失敗しながらでもやってみると、少しずつ自信がついてくるものです。

私は、若い頃、外国人教師に、「君たちは俳優になりたいと思っただけか？」と聞かれたことがあります。私たち生徒の多くは「めっそうもない」という顔付きで「ノー」と答

えると、その教師は言いました。

「人間というものは、誰もが望むと望まざるを問わず、一生を通じて、一瞬一瞬を、自分を演じながら生きる、つまり俳優なのだよ。」

みんなして、「なるほど」とうなずかされたことでした。

せつかく長い一生を生きるのなら、やはり自分自身を最高に演じ切るような生き方をしたいものです。恥ずかしいなどと遠慮していたのであれば「損」というわけですね。

もう一昔も前のこと、東京からの帰りの電車の中で、大宮駅から養護学校の中学生の女生徒が二人乗り込みできました。彼女たちは、巧みな手話に夢中で、電車が栗橋の駅に着くまでずっと対話をしていました。その身振りがとても楽しそうでした。でも、一人が栗橋で降りるとき、電車の中の一人はとても悲しそうなお表情で、ドアのガラスに額をびったりと寄せて、プラットフォームに降りた友たちと別れを惜しんでいました。多分、明日のこの時間まで彼女たちは、こんなに生き生きと対話を楽しむ時がお預けになってしまうのだなあと、とてもいじらしく思えました。



下野市 菊地 喜平

読み聞かせを体験して

町の図書館の指導で、「学校図書館ボランティア」が立ち上げられ、私も入会したのは数年前のことである。小学校をまわって図書の修理・整理をするのが主な仕事で、将来は読み聞かせも、ということだった。

事前に、ほぼ一年間の準備期間があり、それぞれの講師について研修会がもたれた。修理や整理については問題なかったが、経験のない読み聞かせにはほとんどの人が尻ごみをした。しかし、会の誕生から一年後には、町内の一つの小学校で朝の読み聞かせが実現し、六名の読み手がデビューを果たしたのである。高齢で、距離的にも無理のある私は遠慮した。しかし、読み聞かせに取り組む会員たちのいきいきとした姿を見るにつけ、私の気持ちの奥で何かうずくものがあつた。

ある日、地元の小学校の茶摘みの手伝いにいったとき、私は思いきって校長先生に「読み聞かせをさせていただきませんか。」と、お願いしてみた。幸い喜んでいただき、他に一人協力者があつて、その小学校が閉校になるまでの三年間、私はまさに水を得た魚の如く、いそいそと朝の十五分間の読み聞かせに取りくんだ。全校児童が六十名に満たない学校なので、全員を二つのグループに分けて、私は高学年の方を担当した。

今から四十年ほど前、私はこの小学校の教師として勤めたことがあつた。ほとんど一年生の担任だったから、子どもたちによく絵本を読んでやったものである。当時の絵本が今も手元に

あるが、そのころの印象はほとんど残っていない。今思えば、体育の時間、雨が降ったから本でも読んでやろうかというような、時間つぶしの安易なものだったのかもしれない。

私たちボランティアの会員は、身近なところで朗読の指導をしてくれる先生にめぐりあい、私も七十歳過ぎての手習いを始めた。この出会いがなかったら、読み聞かせという活動がこれほど楽しく、また価値あるものとは、思わなかったかもしれない。

これによって、私の民話や童話の読み方ががらりと変わった。子どもたちにより良く伝えたいと思うあまり、声を出して何度も読むうちに、次第に内容の理解が深まっていくのである。かつて難しい本ではない。しかし、なぜか回を重ねるうちに、登場人物の心の奥まで見えてくるような気がしてワクワクする。たかが絵本などと少々軽く見ていた子ども向けの本が、今、新たな命をもって私をとらえるのだった。

昭和の初めに生まれた私は、新しい作品にはなかなかなじめない。大正から昭和にかけての童話、海外の読みふるされた作品などになってしまふから、今の子どもたちがどれだけ受け入れてくれるかという不安もあったが、やはり私は自分の感動を伝えたいと思った。

日本の民話の外に、芥川龍之介、宮沢賢治、新美南吉などの童話のいくつかは、予想外に喜ばれた。また、ビクトル・ユーゴーの「ああ無情」が大きな感動を呼んだことにも驚いた。これは、毎月二回ずつ、五か月ほど継続して読んだものだが、子

どもたちの声によれば、次回が待ち遠しかったそうである。

多分、今の小学生たちは、右のような作品を自ら選んで読んだことはなかったろうし、もし、読んだとしてもどこまで理解できたかという点には疑問も残る。

読み手に、この感動をなんとかして伝えたいという願いと努力があればこそ、子どもたちの理解も深まるのではないかと、私は自らの体験を通して感じた。

子どもたちのきらきらと輝いていた瞳^{こゝろ}を私は忘れることができない。

大田原市 女性

読書は心の栄養

「百冊読破」と思わずバンザイをしてしまいました。

昭和三十六年の頃、ある大手の会社のコンピュータの入力の仕事をしていました。その時、五十分間入力すると十分の休み時間がありました。その十分間をつなぎあわせて読んだのが百冊でした。

結婚して子どもができて読み聞かせをすることにより、二人とも本が好きになりました。時々児童書を買って子どもに与えているうちに、二百冊近く絵本がたまっていました。

今では孫がそれを読んでいます。こんな投資も周囲では無駄だといっていましたが、私は決して無駄には思えません。何世代にも利用されることになるであろうと思うからです。

たしかに本を読むことにより心が豊かになります。周囲の人たちにも勧めています。幸いなことに近所に図書館もできました。ほとんどたいくつしないで済みます。これも若いころに読書の楽しさを知ったからだだと自負しています。

最近、本を読まない人が増加していると聞いています。心に栄養をつけるのは読書が一番だと思います。

鹿沼市 岡本 チヨ子

声のボランティア

「あら！こんにちはー。」

「どちらへ行かれるんですか？」

踏み切り近くのお宅から出てきて、その曲がり角でバッタリお会いした方は、私が十数年前に朗読ボランティアをしていた時の利用者のお一人でした。

「嶋村さんでしょうか？」

「はい！そうですよ。よくわかりましたね。お元気ですか…。」
目が見えない筈なのに、どうしてわかったのかと不思議に思

っていましたら、いつの間にか彼女の丸味のあるふっくらとした手で、私の指をまさぐっているのです。

「だって、最初の声でわかりましたよ…ウフ。」

あの頃からも十数年も経っているのに、すっかり忘れられてしまったかと思い、軽い会釈をして通り過ぎようとしたところでした。

昭和五十九年三月、職を退き家庭人となった私は、自分のできるボランティアはないものかと考えておりましたところ、町の社会福祉協議会主催の朗読ボランティア養成講座が開かれることを知り、数週間の講座を受けて、視力障害者の方々と接する機会を得たのでした。

視力障害者の方へ町の広報や、図書館の蔵書などを朗読して録音し、更に、録音したものを多くの利用者の方々にうまく利用できるように、数本のテープにダビングし、自宅へお届けするのです。そして、帰りには前回のテープを回収してまとめて置き、いつでも再度の利用に応えられるようにするシステムで、会員が数名ずつの班に分かれて、毎週金曜日に集まっては企画から本作り、宅配と続けておりました。

この一冊の本を作りあげることがはそれこそ大変な労力を伴う仕事でしたが、それを待っていてくれる人がいるということが、大きな励みとなりました。また利用者の方々が視力を失ったことによる多くの困難を克服して、力強くそして明るく生き抜いている生活ぶりを直接目にして、健常者である私は逆に勇気づ

けられていることに対して、感謝せずにはいられない心境でした。

不馴れの頃は、訪問して玄関に入るのにも何かと躊躇するものがありました。お会いする回数が多くなるにしたがい、視力を失った方とは思えない程の明るい元氣な声と笑顔で迎えて下さり、肩や手に触れながら話していると、次第に心の中に充足感が満ちてくるのでした。

でも、障害者の方への思いやりが不足していたことを反省させられたこともありました。本を読み録音する時は、できるだけ雑音が入らないように部屋を閉め切ってやったり、発音、イントネーションに気を付けて録音したつもりでしたが、耳から入った本の世界に集中して自分のイメージを描いていく障害者の方々にとっての雑音は、耳ざわりなことであり致命傷となることを理解していなかったのです。以後、家庭で録音する時は、真夏でも外部の音を遮断するために部屋を密閉し、冷房器機から発する音を切るなど、神経をとがらせましたが、録音の途中で訪問者の押すインターホンなどの音が入ってしまうこともありました。そんな時は、その場でストップし逆戻しして再度録音をやり直す始末。ダビングの段階でも二台の録音機を据え三台を並べて一度に三本のテープを作るのでした。

丁度、読書会の集まりで図書館に行くところでしたので、本についての話など冗談を交えた会話もいたしましたが、久しぶりにお会いした筈なのに、月日の流れを感じさせない程身近な

ものでした。現在は、事情で退会して居りますが、折を見て復帰したいと考えています。

那須塩原市 女性

「ラジオ深夜便」を手にして

数年前の話です。NHKの深夜番組、午前四時からの「この時代の」という放送を、夢つつのまま耳にしました。

陸の孤島といわれる村の話です。道路の整備や村人の交流を図るために、いくつもあつた分校を統合し立派な中学校を建てたところ、贅沢だという理由で補助金をカットされてしまった、というような話に真剣に聞きいってしまいました。その後、文部省の方が視察に見えて、かくあるべきと絶賛されたとか。後に日本建築学会賞を受け雑誌のグラビアに出たそうです。

その後、「ラジオ深夜便」が発行されていることを知り、平成十七年の年末から入手できました。すると、翌年の二月号に以前ラジオで聞いた話が、「田野畑村に梅が咲く頃」といった題名で載っているではありませんか。まるで旧知の友に出会ったような思いで一氣に読みました。

岩手県北部の田野畑村の村長・早野仙平氏が、漁業組合長を十年、村長を三十二年間歩まれてこられた記録なのでした。

物心両面孤立状態の村に、道路こそ村の命であると、用地の取得から着手、最短のコースで開通へと漕ぎつけたところ、どうして田野畑村だけ工事が進んだのかと不思議に思われましたが、知恵を絞った結果の成功といえましょう。

「次の世代には胸を張って『田野畑村出身です』と自信をもつて言わせたい。」これは、村政の大きな柱として教育を揚げた村長の、意気込みと将来への大きな希望、夢の言葉です。

また、乳児の死亡率日本一のこの村の医療体制を確立するため、千葉県から臨床・一般診療共に経験豊富で有能な先生を迎えられました。村長との挨拶が済むと、先生は「村長、私はこの村で何をすればいいのですか。」と聞かれたそうです。私は「何故こんなことをと、一寸考えてしまいました。医者が？」と。村長は「患者を治すより、村民が病気になるための教育をお願いします。診療所は赤字になっても経営面には気を遣わないで下さい。」と。この会話を読んでお一方の立派な人格が伺われる思いがしました。

次は更に心うたれたことです。この先生の奥様は転地療養を要するお方でしたが、四年程村で生活なされました。野の花等を通して村の人々と共に心温まる交流をされてこられました。が、千葉に帰られ暫くして亡くなされました。この報を出張先で受けられた村長が、喪服と弔辞の用意を指示し、翌日斎場にかけてつきたところ、見ると会葬者の大半が村の人たちでした。遠隔の地岩手から夜通しバスを走らせ、千葉の斎場に着いた様子でした。村長は「奥さんからいただいた庭の小梅の蕾がよ

うやく出てきました。」と弔辞に読まれたそうです。現在村には「花笑み基金」が設けられています。「妻の好きだった梅の花で村いっぱいにして下さい。」と寄付されたもので、今では二百本以上の梅が植樹されているそうです。

後日、村に關係の深い作家、吉村昭氏にこの話を話されたところ、早速「梅の蕾」という題名でこのことを書かれ、好評で読者が貰い泣きをしたと電話があったとのことでした。

まだまだ多くの話題はありますが、村長さんをはじめ先生のご家族、村の方々の誠実さ、優しさ、何と表現することが良いのか、純粋な皆様の気持ちに心打たれ、忘れられない思い出の一つとなっています。

先生は、その後二十年近く村に残られたとお話です。

足利市 女性

